

Top Interview

— 変革に挑む —

まとめ／荒尾貴正 撮影／中岡邦夫

アートやデザインの力で 東北や地域の再生に 貢献する人材を輩出したい

1 1992年、本学開学に当たり「設立の宣言」を掲げました。そのなかで「日本文化の源流」としての東北に注目するとともに、「近代文明は人類自らを存亡の危機に立たせているのではないか？」という厳しい問題提起もしています。そうした指摘が正に現実のものになったと思われたのが、東日本大震災および福島原発事故でした。

私はあの直後、2011年4月に学長に就任しました。以来、東北という名を冠した大学として、今何をすべきか、これから何をしていくべきかをひたすら考え続けています。結論として本学最大の使命は、東北、また全国各地で新しい生活や文化の基盤を創り上げていく人材を輩出することと自覚するに至

りました。裏返せばそれは、アートやデザインは、これからの日本を創るうえで大きな力になり得ると私たちが強く信じている証です。

昨今大学に対して、問題解決能力の育成を求める声が強まっています。私からすれば、芸術大学ほどそれが身につく環境はありません。学生は日々作品づくりを行い、仲間との打ち合せや実作業に莫大な時間を費やしますが、そのすべてが問題解決能力を磨く時間と言っても過言ではありません。さらに本学には地域連携の伝統があり、地域の人たちと協力しながら、地域課題の解決に資する作品づくりを行っているケースも数多くあります。

「問題解決」と「地域連携」を専門的に

学ぶ学科として、「コミュニティデザイン学科」を来年4月に立ち上げる予定です。人と人とのつながりである「コミュニティ」という観点で、各地の課題解決に貢献する「コミュニティデザイナー」を育成していきます。この学科の創設により、本学全体がもっと多くの地域と結びついていくことも目指しています。

これまでの芸術大学は、トップアーテリストを生み出すことに多くの力が注がれてきたように思います。これからの芸術大学は、そこでアートやデザインのリテラシーを身につけた人たちが社会を変える真の原動力となることを、すなわち企業人や公務員となつて活躍することを、もともとと応援していくべきではないかと私は考えています。そのため本学は低学年からのキャリア教育を充実させ、学生の意識づけにも工夫を凝らしています。ここ数年で教職員の意識もかなり変化し、就職サポートを熱心に行っていることもあって就職率が向上しています。

本学は「絵がうまくない」人もOK。実技試験を課さない学科や、従来の芸術大学の枠組みを超えた学科も多くあります。本学のマインドに共感してくれる若者には広く門戸を開いています。



東北芸術工科大学
学長
根岸吉太郎

【学長プロフィール】ねぎし・きちたろう●1950年生まれ。早稲田大学第一文学部演劇学科卒。映画監督。『遠雷』(1981)でブルーリボン賞監督賞・芸術選奨新人賞受賞。『ウィヨンの妻～桜桃とタンポポ～』(2009)でモントリオール世界映画祭最優秀監督賞受賞。2011年より現職。

【大学プロフィール】1992年開学。芸術学部(美術科、美術史・文化財保存修復学科、歴史遺産学科、文芸学科)、デザイン工学部(プロダクトデザイン学科、建築・環境デザイン学科、グラフィックデザイン学科、映像学科、企画構想学科、コミュニティデザイン学科<2014年4月開設>)